

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

23 父さんの信心

第二十三日め（四月七日）

町のホテルで所在なく、夜をあかす。ホテルの朝食は、中国風のおかゆではなく、モンゴル風の乳茶と黍。乳茶も黍も、ダンゼン家で食べているものにかないっこない。町よりいなかが、おいしい。そそくさとホテルをでて、買物にでかける。

わたしのフィールドノートにいたずらがきをするアルターのために、紙と色鉛筆を買う。南家の子どもたちには、クッキーを買う。わずかばかりのおみやげを購入したあと、貝子廟バイジミョウにむかう。

貝子廟は、壮大なラマ寺院である。内部に、崇善寺、慶善寺、延福寺などのほか、学堂や僧房をいくつもふくんでいる。アバハナル旗の中心地、現在のシリンホト市内に存在する。というよりも、この寺を核として、草原のなかに門前町シリンホトが発展したのであった。

かつては、ラマやシャビとよばれる僧たちが総勢千人をこえていたが、現在はおよそ二十人が常住しているにすぎない。しばしば往来している僧たちをふくめると三十人ほどで、法会のさいには六十人ほどになる、という。とくに盛大な法会は、新年をむかえる一週間で、その期間には一日三度のマンジ（お茶）以外ずっと読経がつづけられる。

寺のいたるところに、文化大革命のはげしい傷痕が目撃される。十年間あはてていた寺にも、最近

ようやく復興のきざしがあらわれた。整備して、観光資源にしたいとする管理当局の意向もあって、寺の修復がすすめられているのである。

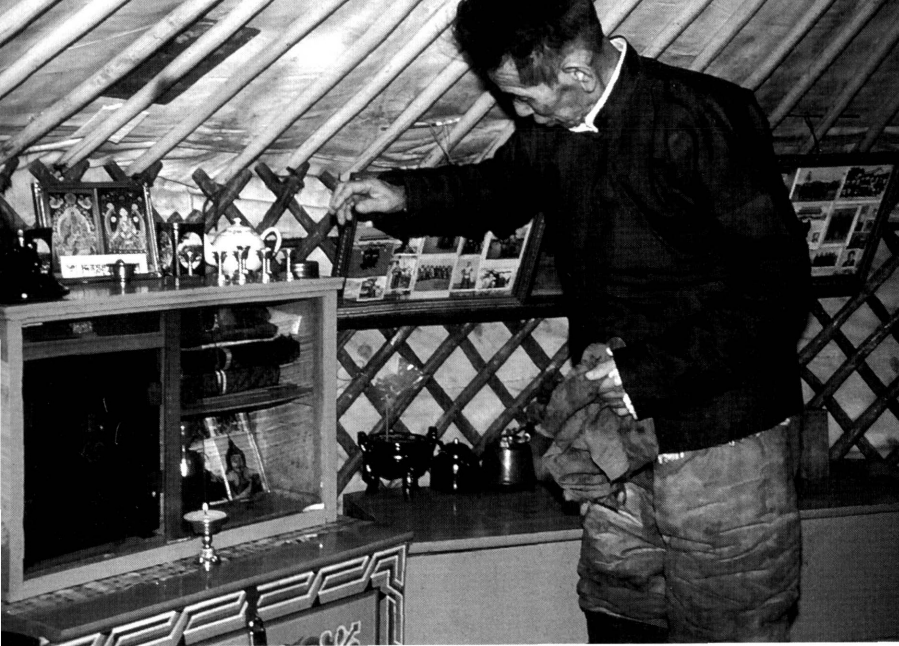
わたしがここをたずねたのは、ダンゼン父の名代で、一人のラマ僧をむかえるためであった。ユンダンジャムツという坊さんを、草原のわたしたちの家にまねき、お経をよんでもらうことになっていた。

ダンゼン父もモージ母も、ラマ教に帰依している。とりわけ、牧畜の仕事からすっかり引退した父は、もっぱら仏事をみずからの仕事にしている。

たとえば、毎日チーズを天にそなえる。ホロートとよばれる乾燥してかたいチーズを少々手にとり、戸外にでて、空中へまくのである。起床後、朝ごはんの乳茶をのむまえと、就寝まえの一日二度、ばらまく。空になげられ、地におちたチーズを、後日発見することはできない。きつと、イヌがたべているのであろう。それでも、これはイヌのえさなんかじゃない。天にいる仏さまたちにささげた食である。

さらに、灯明をとます。毎日、朝食後のそうじがすんだあとに、小さな灯明皿に火をいれる。灯明のことは、ろうそくなどと同様に「ゾル」とよばれる。「ツォクツ」という銀製の杯をもちいる。大小ふたつあって、ともに最近細工されたもの。その原料である銀は、文化大革命のあいだずっと搾乳桶のなかにいれて、秘蔵していたという。

銀杯のなかには、固形の脂がつめこまれ、綿の芯がうめこまれている。脂の原料は、ヒツジの腎臓付近をおおう脂肪。十月に屠殺したヒツジの脂肪をつかう。「ゴツ」とよばれる小さなやかんに脂肪片をいれ、あたためて脂をとかし、液体状の脂を杯にそそいでつくる。脂肪は、やがてなくなるので、五月ごろからはバターをもちいる。灯明をとますだけでなく、こうして灯明をつくるのも、もちろんダンゼン父の仕事である。



仏事にいそしむ父

ちなみに、バターは、「シャル・トス」すなわち「黄色いあぶら」とよばれ、原料の微妙なちがいから二種類存在する。「ズーヒー」とよばれるすっぱい生クリームを原料にしたものと、「ウルム」とよばれるすっぱくない乾燥させた乳脂肪を原料にしたものである。後者のほうがおいしく、前者のほうは匂いも味もないので、灯明には前者のほうをもちいる、という。

ホクシン・エージは、牛の脂肪とウルムからできたバターをまぜて、ゴツのなかにいれてあたため、ツォクツにそそいでいたから、灯明のあぶらにきびしいきまりがあるわけではない。彼女の場合は、ときどき灯明をともしただけだが、ダンゼン父は毎日欠かさなかった。父が不在のあいだ、モージ母が代行した。

また、旧暦の毎月二日と八日には、大きな銀杯のほうに火をともし、さらに、このときには、「フージ」とよばれる線香もつける。

さらにまた、腕に小さな仏像をいれ、毎日水をみたく。水のなかにすわる仏は、「ジャンバルガ

ラブ」とよばれている。毎日本をそなえれば、できるかぎりまもってくれる、という。

常日頃、こうして敬虔な祈りをささげるほかに、ダンゼン父は巡礼にでかけたこともある。一九八六年、五台山をおとずれ、アラシャン（聖なる水）をもちかえった。また、山でつんだ花もちかえり、薬として大切にしている。その花の煮汁は、冷の性をもつもので、家畜が熱のあるときにのませる、という。

ダンゼン一家は、さらに貝子廟に喜捨している。三人のラマ僧にガンジョール（胎藏経）をよませている。そのための費用として、一人あたり年間三百元の三人分、それに寺そのものに百元をくわえて合計千元を現金で寄附している。またそれ以外に、バター、石炭、小麦粉などの品々も喜捨している。

これだけ功德をつんでいるうえに、さらに金光経を自宅で読経してもらおうという計画をダンゼン父は考えた。ガンジョールの読経を依頼している三人のラマ僧のうちの一人であるユンダンジャムツじいさんを草原の自宅にまねくのである。ユンダンジャムツ僧の支度をまち、ダンゼン父をその宿舎にむかえにいったときには、すでに午後二時をまわっていた。

雪のつもった草原の道は、たとえ日本製の優秀な4WD車でもはしりにくい。運転手は、穴におちないように注意深く、車をすすめる。ようやく草原のわが家に到着したのは午後四時。外事局のスタッフたちは、夕食もたべずに、いそいで町へともどっていった。

異邦人にくわえて、今日から客人が一人ふえた。おそらく、この客人はわたしと一緒に町へかえることになるであろう。町までなら、ウマでもいいける。しかし、僧の送迎にふさわしい車はそう簡単に準備できない。わたしをむかえるために、またあの4WD車は一週間後にやってくるであろう。一ヶ月の許可期限がきれるとき、わたしはこの家をさって町へいかなければならない。わたしを町へつれていく車が、この僧を町までもどすことになるだろう。

午後六時。羊人ソヨルトがラクダで帰還する。あの吹雪の日に、ウマをおりてあるいて帰宅して以来、ソヨルトはウマからラクダにきりかえて放牧にでている。ダンゼン父が彼にそう命じたのだった。

羊人ソヨルトはラクダからおりると、オート袋から子ヤギたちをとりだした。きょう放牧地でうまれた子ヤギ五匹。ほかに、四匹の子ヒツジもうまれたが、それらは母ヒツジとともに帰営した。家人たちは、子ヤギをうけとって、じっくりながめいる。子ヤギの毛色などをじっくり点検して特徴をみいだそうとする。いまのところまだ、その母ヤギがどの個体であるか不明である。したがって、子ヤギの所有者はまだこの時点ではわからない。

午後七時、ヒツジの群れが宿営地に近づいてきた。この日出産した母ヤギたちも、その群れのなかにいる。人びとはどのようにしてヤギの母親と子を対面させるのだろうか。

午後七時二十分。ようやく、ヒツジの群れは宿営地のすぐそばに到着し、休止した。さきほど袋ではなから数頭のヤギがメイメイないて、名のりをあげる。群れのなかから自発的にでてきて、子ヤギの匂いをかぎはじめた。まぎれもなく、その子ヤギたちの母である。こうして親子の対面がはたされる。と同時にだれのヤギが、どの子ヤギをうんだのか、人が理解することもできる。

なかには、名のりをあげてはいるのだが、石垣のほうへやってこないヤギもいる。まだ、親子の対面ができない子ヤギの母であるらしい。ウネルバヤンは、のこっている子ヤギ二匹をひろい、両わきにかかえ、群れのほうへと近づいた。群れのすぐそばから、子ヤギをみせれば、母ヤギをおびきよせることができる。

こうして無事、すべての子ヤギの母が確認された。すべて実母実子の認知関係は確立されていて、哺



朝食はいつもキビ入り乳茶と乳製品

乳を補助する必要もなさそうである。

対面をはたした母子ヤギをペンとよばれる暗室のなかにみちびいて、石垣ヘレムをでると、午後七時四十分。あたりはもうすっかり暗い。

きょうは、夕方の作業がおくれている。もうそろそろ、老父母の就寝時間である。いそいでゲルにもどろうとしたとき、群れの端でウロウロしているヤギがみえた。からだの小さなヤギがねそべっていて、そのまわりをやや大きなヤギがグルグルまわっている。即座にウネルバヤンがわからないがらいう。

「娘の出産に動転しているよ」

と、解説してくれた。小さなヤギが初産をむかえていて、その母ヤギがあわてている、というのである。

二頭のヤギは母子であって、子のほうは満一歳をむかえる。うまれたばかりならともかく、一年たったいまでも、子と母はそばにいる。近接しているばかりでなく、たがいに母子の関係を認知しているらしい。少なくとも、母のほうは子をまだ

おぼえている。娘が出産して孫ができるときまで心配するほど、母子のきずながつよいのである。家系としてのまとまりができることになる。

子ヤギは子ヒツジとちがつて、つねに母とともに管理されているわけではない。日中は、囲いのなかについて母ヤギたちと分離されている。しかしながら、こうした幼少期の分離にもかかわらず、母子のきずなは相当につよい。かなり長期にわたって維持されていることがわかる。群れのまとまりにとって、母子のきずなにもとづくまとまりが、凝集の核となっていると考えられる。

午後八時の外気は、マイナス二度。きょうは、もう遅い。読経は明日から、ということになった。